

## 36 梨殿さんと間生さん（備中梨づくり異聞）

岡山県庁ホームページに「フルーツ王国岡山」とあります。今では全国どこにでもありそうな王国です。しかし、今は昔、明治30年代から大正期、岡山県は量・質共に全国に比類なき果物生産地としてその名声を博したのです。そして、その種が蒔かれたのがこの備中足守であったこと、皆様はご存知でしたか。

時は江戸末期に遡ります。足守藩第十三代当主利恭は、窮乏する藩財政打開の一策に本格的な梨栽培を思い立ちました。

万延元年（1860）、上野国（群馬県）勢多郡大島村の関口長左衛門（梨昌翁）を招き梨栽培の適地性について実地踏査を受けました。次いで

文久3年（1863）3月には、下足守コウノベの福田亀蔵、大月市之助、田口作次郎の3名を選抜し研修生として関口翁のもとへ留学させます。

研修を終え3名が帰藩するのは慶応元年（1865）11月のことですが、彼等は研修中の元治元年（1864）に淡雪、赤竜など早生、晩生7種の梨の穂木を国元へ送り届けます。

利恭は、接ぎ木の名人と言われた河原村三明の頼田宇治郎に命じ専心育苗、4500本の成苗を得、これを大井村馬場山に1000本、粟井村柏尾に400本、東山内村に1000本、足守村寺坂に500本、同村一国に500本、生石村門前に300本、同村下土田に300本を都合6町歩に定植しました。

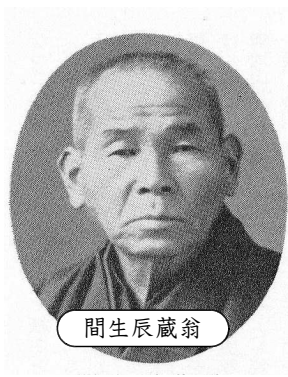


なったのです。

粟井村山ノ田の間生辰蔵さんのお家は代々足守藩の山林管理を行っていたのですが、その縁で明治4年、藩の梨園処分に際し、赤竜種二株を拝領し、屋敷脇の畑に移植したことが梨との付き合いの始まりでした。この木が成長し年30個～40個の実を付けるまでになったころ、頼田宇治郎さんと舩作り（分益）による指導を受け、明治13年には1樹から20貫



そして、まさにその前途が開けようとした矢先、明治維新を迎え藩事業としての事業は無念にも頓挫したのでした。しかし、「…は死して皮を留む」とはこのこと。福田亀蔵等3名が習得した梨栽培技術は、有志伝いに郡内から県内各地へ広まり梨を県の主要果樹として大成させます。そして、これが端緒となり、桃その他果樹の生産拡大につながり、幾多の失敗と試行錯誤の積み重ねを経て、岡山県は果物王国として全国に名を馳せることとなったのです。



間生辰蔵翁

を収穫、これを5円で販売。(当時、上田1反の収入が10円内外)  
その後も好成績を続け、間生園は、総面積1町歩に及ぶ一大梨園となり、明治24年には桃の栽培にも着手するなど順風満帆に経過します。

このような間生さんの成功例は園芸を志す者の羨望の的となり、山ノ田への見学者は相次ぎ、穂木、苗木の分譲希望も多くなりましたが、間生さんはこれら後進の指導に力を惜しみませんでした。

しかし好事魔多しと申しますか、明治26年頃から事情は一変します。梨の葉に赤黄色の斑点ができる赤星病、葉に煤のような斑点を生ずる黒星病が蔓延、7月～8月に落葉し果実は肥大せず甘味絶無という次第。明治34年(1901)岡山県農事試験場が創設され、やっと対策が講ぜられますが、これに追い打ちをかける如くに発生した貝殻虫や芯喰虫退治に費やした都合10カ年間は、間生さんにとって涙なしには思い出せない悲痛な期間となったのでした。



山ノ田池から見る梨園跡と白○は間生家跡

このような曲折を経てなお、間生さんは明治44年の県果物同業組合設立に当たり、吉備郡の先覚者として発起者に名を連ね、組合設立後は役員として業界の発展に貢献したのでした。今、山ノ田池の堤に立てば、間生家の格式高い家屋敷、盛大を誇った梨園は一面の深い緑に沈み込み唯々歴史の長さを偲ぶばかりです。



間倉能瀬家の伝足守藩梨園拝領の梨の木と果実

※ カットは、間生辰蔵さんの曾孫で池田遙邨に師事された日展会友の日本画家藤原郁子さんの作品「季果」。(藤原郁子作品集「風景彩時季」から。)



季果



(資料：日本文教出版(株) 三宅忠一著「岡山の果物」。間野幹男著作・発行「備中足守の園芸史」)